

茨木市立 玉島 小学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和5年 10 月作成

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

（領域ごと）

- ①言葉の特徴や使い方に関する事項 概ね良好な結果であった
- ②情報の扱い方に関する事項 概ね良好な結果であった
- ③話すこと・聞くこと 概ね良好な結果であった
- ④書くこと 概ね良好な結果であった
- ⑤読むこと 概ね良好な結果であった

（問題形式）

- ①選択式 概ね良好な結果であった
- ②短答式 大変良好な結果であった
- ③記述式 概ね良好な結果であった

（無解答率）

概ね良好な結果であった

（その他）

- ・1-三 漢字の書き取りや選択の問題は、無解答率が低かった。
また、正答率も全国平均より高かった。
- ・2-二 内容を読み取り、まとめたものを選択する問題の正答率が低かった。

分析

1 傾向

- ・無解答率が一番低かったのが、漢字の選択式の問題であった。

2 成果

- ・全体的に昨年の結果と比べて、正答率が高く、無解答率が下がり良好な結果となった。また、ほとんどの項目で概ね良好な結果であった。

3 課題・授業での重点的な取組み

- ・短答式は全国平均よりかなり高い結果となったが、記述式は課題が残るので、学習後の振り返りや単元の学習の中に自分の考えを記述する時間を作り、書く力をつけていきたい。
- ・「日常よく使われる敬語を理解しているかどうかをみる」という設問では、正答率が低く課題が残った。授業で尊敬語、謙譲語の理解を更に深めていきたい。

〇●算数●〇

(領域ごと)

①数と計算	概ね良好な結果であった
②図形	概ね良好な結果であった
③変化と関係	概ね良好な結果であった
④データの活用	やや課題が残る結果であった

(問題形式)

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	概ね良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

- ・ 1 (1) 5脚の椅子を重ねたときの高さを求める問題の正答率が最も高い。
- ・ 2 (4) 三角形の面積の大小を判断する問題の正答率が最も低かった。
- ・ 4 (3) 棒グラフから見いだした違いを記述する問題の無回答率が最も高い。
- ・ 1 (4) 50×40 の計算では、無回答率も少なく、本校の正答率が全国の正答率よりも高い。

分析

・一の位が0の二つの2位数について、乗法の計算ができるかどうかをみる問題について、全国の正答率より高くなっている。それぞれの学年で取り組んでいる反復練習の成果であると考ええる。

・全国の無解答率と比較しても、本校の無解答率は、全体的に低い数値となっている。しかし、問題形式が記述式であった場合は、無解答率が高くなり、考えを言葉で表現することに課題が見られた。

・記述式の設問に対し、立式はできるが、立式の理由や意図を正確に説明できない様子が見られる。

・全体的に記述式の問題への解答率が低かったため、既習事項を活用し、考えの根拠を明らかにしながら筋道を立てて説明する力を育み、表現する経験を学び合いの活動を通して積み重ねていく必要がある。

経年比較

全体的な傾向についての分析

過去5年間の中で国語は、正答率が最も高い。無解答率は年度により増減はあるが、今年度は、昨年度より減少している。しかし、全国平均より無解答率は高く課題がみられた。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

学力低位層は過去7年で最も少ない。
高位層は過去7年で最も多い。
EP 層は過去3年間で最も低くなっており、基礎学力の定着が見られる。

取組み

学力向上に関する取組み

1 基礎学力の定着

- ① ひらがな、カタカナ、九九などの学びの基礎となる読み書き計算の定着を検証するため、「ひらがな検討会」を行い、取り組み結果を検証する。また、「さんすうチャレンジ」については、児童がつまずく前の支援として活用する。
- ② 本校児童の学力課題を明確にし、つまずきを早期に発見していく。また、つまずきを補うための学力や知識を身につけることができるよう、個に応じた補充課題を実施していく。

2 言語活動の充実

- ① 1年生の段階からペアによる学び合いの場を授業の中に設定し、学力低位層の子どもたちが安心して「わからない」「教えて」といえる集団づくりを心掛けていくことで、ペア学習・グループ学習の充実を図っている。その中で子どもたちが対話を行うことで学力高位層と学力低位層の子どもたちが学び合い、高め合えることをねらいとして授業づくりをしていく。
- ② 文章を読み取る力や語彙力を増やすため、委員会活動や保護者への呼びかけをとおして、読書の機会を増やし、読書量の確保と読解力の向上に努める。

3 授業方法・内容の工夫と改善

- ① ペア学習やグループ学習の充実を図るために、複数の解法がある問題や既習事項の活用が複数必要となる教材を授業の中心教材として設定している。
- ② 子どもたちが授業のふりかえりを記述し、何がきっかけで何がわかったのか・何がわからなかったのかを授業者が把握し、以降の授業展開に活用していく。

4 学校全体としての取組み

- ① 子どもたちのふりかえりをどのように授業展開へ活用したかを校内で共有し、お互いの授業改善に活かす。
- ② 授業改善担当者を中心に、研究授業や授業観察の中から、自ら考えることを促すためにはどんなことが有効かを検証し、校内でフィードバックや検討会を行う。